

お見合い婚するはずが、

溺愛豹変した御曹司に蕩かされて娶られそうです

プロローグ

「君を抱きたい」

激しい口づけのあと、彼——碧さんあおにそう言われて、心臓が大きく跳ねた。

初めて訪れた彼の部屋で二人きり。これから私は、この美しい男の人と体を重ねる。

——まさか……この人と自分がこんなことをする仲になるなんて……

少し前まで会話を交わしたことすらなかつた。だつて彼は、私は住む世界が違う人だから。

「はあっ……、あ……ン……、や……」

キスから始まり、胸の愛撫あいぶへ。それからショーツの中に手を差し込まれ、蜜口みつこうに指が触れた。すでに溢れていた蜜が音を立て、とろりと彼の熱い指に纏わりつく。

「もうこんなになつてる」

「やだ……。言わなくていいから……」

すでにじゅうぶんに蜜は溢れているものの、こういつたことをするのは数年ぶり。どうしても無

意識のうちに体が強張つてしまう。でも、彼の優しい愛撫によつて心も体もだんだんほぐれてきた。

——気持ちいい……

緩やかな快感に浸つていると、不意に彼の長い指が中の敏感なところを強く擦り上げた。甘い痺れに襲われて、体がビクッと揺れる。

「ここ、気持ちいいんだ？ 指増やそうか」

「え……、ま、待つて、ま……」

でも、彼は待つてくれなかつた。さらに蜜口へ指を差し込まれ、ますます翻弄^{ほんろう}されてしまふ。それどころか、今度は舌で蜜口を舐め始めた。あまりの快感にシーツを掴み、上半身を^そ反らせて悶える。

「……つ、は……、ン……つ、ああっ……!!」

「ン……、すごく濡れてる……興奮する……」

嬉しそうにピチャピチャと音を立てながら蜜口を舐め上げる碧さんの目が、熱く滾つている。爽やかでキリッとした普段の彼とのギャップに目眩^{めまい}がするほど興奮する。

——あの碧さんと私がこんなことになるなんて……今でも信じられない。

大企業の御曹司である彼と、ごく普通の私。

そんな私たちが恋人になつたのは、きっと出会うべくして出会つたから。

つまり、縁があつたから。

快感に蕩けながらも、頭の片隅で私はそんなことを考えていた。

一

緑豊かな景色の中で、悠然と泳ぐ色鮮やかな鯉。たまにどこからか鴨もやつてきて、愛らしい姿を参拝客に披露してくれる。

街のオアシスのようなこの神社は、長年にわたつて地元の人々から愛されてきた。

ひとつそりと佇む静かな神社だが、とある著名人がここを参拝したあとに意中の人と結婚が決まつたと明かしたことをきつかけに、遠方からの参拝者の姿を目にすることも多くなつた。

そんなとある神社に、思いを馳せる私——剣持晶葉^{けんじょうは}二十六歳。

——庭の掃除、やつてくれたかなあ……。本殿の裏に落ち葉が結構あつたんだよね……

オフィスでパソコンのモニター眺めながら、ぼんやり思う。

「剣持さん、ちょっと見積もり出してもらつていいかな。この前のベランダの雨漏り修理の件」

背後から社員の男性に声を掛けられて、現実に戻つた。

「はい。急ぎですか？」

「うん。この内容で入力してもらつて、できたら施主さんに送つて」

「はい」

背筋を伸ばして再びモニターに向かう。

——えーっと、F.R.P.防水処理か……。ランダつて経年劣化でよく水漏れするんだよね……。うちも大丈夫かな。今度チェックしてもらおうかな……。

処理内容を確認しつつ、入力して見積もり書を作成する。出力を終えて、書類を封筒に入れた。

「じゃ、出します」

席を立ち、壁際のデスクにいる六十代の社長に声を掛けた。

「あ、剣持さん。ついでに俺の昼飯買ってきて。カツプラーメン。豚骨がいいな」

「今日はお弁当じやないんですか?」

「奥さんが友達と旅行に行っちゃってさ。明日まで帰ってこないんだよ。だから今日はお弁当がないの」

社長は普段お弁当だが、たまにこうやって奥さんがいない時は嬉しそうにカツプラーメンを食べる。

——多分、普段は奥さんに止められてるんだろうな。

「豚骨ですね、わかりました。行つてきまーす」

トートバッグに財布とスマホ、それと発送する書類を入れて職場を出た。

私が勤務しているのは、実家から徒歩で通える住宅設備会社。トイレや洗面台、キッチンなどの水回り品の設置や修理、それから今回のような住宅の水漏れ修理も請け負う。

社長と社員、パートを含めて従業員が十数人の小さな会社ではあるが、先代社長が開業してから五十年近い歴史がある。そのため懇意にしている業者や顧客も多く、売り上げは堅調だ。

大学在学中に内定をもらったベンチャー企業をわけあって一年で退社し、実家から近いこの会社に転職して二年。残業も休日出勤もないでの、穏やかな日常を過ごせている。

——前の仕事を辞める時はどうなることかと思つたけど、あの決断は間違いじやなかつたな。

私が二年前職を辞めたのには事情がある。それは、うちの家業と関係しているのだが……

「掛けまくもかしこき伊邪那岐の大神筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に禊ぎ祓へ給ひし時に生り坐せる祓戸の大神等諸々の禍事・罪・穢有らむをば祓へ給ひ清め給へと白すことを聞こし召せとかじこかじこもう恐み恐みも白す」

土曜の昼前。自宅を出た私の耳に入ってきたのは、祝詞を唱える兄の声。

——お兄ちゃん、祝詞が上手くなつたな……。

私の実家は代々隣にある神社の宮司を務めている。現在の宮司は父、そして大学で神道を学び神職の資格を取った兄が、次の宮司となるべく補宜として奉職中である。

神社の敷地に入り、まっすぐ社務所へ向かう。あらかじめ自宅で着替えてきた私は、そのまま御守りなどを販売する窓口に向かつた。

「交代します。よかつたら休憩に入つてください」

朝八時半からご奉仕してくださったパートの巫女さんに代わり、私が窓口販売の席に着いた。実は私。本職が休みの日限定で、父と兄が奉職している神社のバイト巫女をしているのだ。

しかし、最初からこの生活をしていたわけではない。

この神社を継ぐのは兄と決まっていたし、私は神職の資格を取る必要もないのに、神職とは全く関係ない大学の経済学部に進んだ。

神社は父や、当時はまだ元気だった祖父、それに叔父なども奉職していたので、巫女のバイトをすることもなく就職し、忙しい毎日を送っていた。

しかしある日。それまで元気だった祖父が突然の病で床に伏し、奉職することができなくなつた。それを皮切りに叔父が怪我、社務所で巫女をしていた母が実家の両親の介護のために奉職が不可能となつてしまつたのだ。

急に人手不足に陥り、急いで求人を募集したもののそう簡単に人は集まらず、残つた父と兄と、怪我を押して窓口を担当した叔父の三人でどうにか業務を行つていた。

その時の私はといえば、通勤に一時間かかる職場で、ほぼ毎日残業。繁忙期は休日出勤の嵐。仕事にやりがいを感じていたものの、家族が困つている時に全く戦力になれない自分が歯がゆくてもどかしかつた。

そんなある日。ついに多忙を極め、父が倒れてしまつた。

——今の仕事じゃだめだ。せめて、手が空あいている時に家族を手伝えるような職場じゃないと……!!

そう強く感じ、転職を決意したわけだが、最初は家族に反対された。

『神社のことはこっちでなんとかするから、お前がせつかく入つた会社を辞める必要はないよ』

家族三人にそう言われて、決意が揺らいだ。でも、やっぱり大切な家族が苦労しているのを見過ごせなかつた。

そんな時に見つけたのが今の職場だ。実家から徒歩五分。お給料は少しだけ下がつたけど、ちゃんとボーナスも出るし人間関係も良好。副業もOKで申し分ない環境だ。

良い条件の職場を見つけたから安心してほしいと家族を説得し、私は無事転職した。

あれからパートさんと、休日だけシフトに入つてくれる学生アルバイトさんも入つた。祖父も回復し、週に数回神社に顔を出せるようになつた。

とはいえ、介護を続ける母は未だに多忙なので、こうして週末に時間がある時は、今も巫女として手伝いをしているのだ。

「お車のご祈祷ですね。では、こちらの用紙にご記入をお願いいたします。終わりましたら、指定の場所までお車のご移動をお願いいたします」

「あつ、はい！ しまつた、車のナンバーわかんない！ 見にいつてきていいですか？」

「はい、どうぞ」

用紙に手を着ける間もなく、祈祷を申し込みにきた女性が駐車場へ戻つていつた。その間、何気なく敷地内を見回していると、スーツを着た参拝客数人の姿が目に入つた。おそらくさつきまで本殿でご祈祷を受けていた人たちだ。その中に背が高く、すらりとした体型の男性を見つめた。

小さな顔に長い手足。まるで紳士服のモデルのようにビシッとスーツを着こなしている男性は、周囲の参拝客の視線を一人で集めている。

——あ。あの人。また来てくれたんだ……

見覚えのある姿に自然とそう思った。というのも、あの人はうちの神社に多額の寄付をしてくれている大手企業——カシイ重工の人だからだ。

創業者がこの地域の出身ということで、カシイ重工さんは昔からうちの神社にお参りに来てくれる。新社屋の建設では地鎮祭をうちの神社に申し込んでくれたり、創業者一族の方々がプライベートで参拝に来てくれたり。とにかく懇意にしてくださっている……と、以前祖父が言っていた。特に創業記念日に近い週末は商売繁盛を願つて、今日のように役員全員でご祈祷を受けにくるのが毎年恒例となっている。

——それにしても、今回も目立てるな……あの人。

私はいつも遭遇するわけじゃないけれど、父や兄がたまにカシイ重工さんの話をしていたり、巫女のバイト中に何度か見かけて、すっかり顔を覚えてしまった。ただでさえ端正なイケメンなのに、年配の人たちの中に混ざっているから余計目立つのだ。

——若いのによくご祈祷に来てるってことは、役員だつたりとか……いや、まさかね……それとも役員のご家族の方とか？ 自分なりに考えを巡らせていると、男性がこちらを見た。思いがけず視線が合つてしまい、慌てて小さく会釈をした。

——いけない。見すぎちゃった……！
しまったと焦つたけれど、相手が穏やかに微笑みながら会釈を返してくれたので、ホッとする。こつちも顔が緩みかけたところで、車のご祈祷を申し込み中の女性が戻ってきた。

「お待たせしちゃつてすみません!! えーっと、ひらがなから記入すればいいですか?」
「あ、いえ。車番だけで大丈夫です」
視線を申し込み用紙に落としてからしばらくして、さつきの男性がいた辺りに視線を戻す。でも、そこに男性の姿はなかった。
そのことを特に気に留めず、私は淡々と業務に戻った。

それから数週間後。

「車の祈祷をお願いしたいのですが」

社務所が開いてすぐ窓口にやつてきた男性に、仕事を忘れて目をパチパチさせてしまった。あの時に目が合つた男性が、今、目の前にいる。

カシイ重工さんの、あの人が。

「お……お車のご祈祷ですね、かしこまりました……」

「はい。お願いします」

前回はスーツだったけど、今日は私服だ。この前はシャツで隠れていた首筋が、今日は露出していく少しどぎまぎする。

——この人、私がいる時に個人的な参拝は初めてじゃない? びっくりした……

「で、では……、こちらの用紙にご記入をお願いいたします」

彼の前に用紙とボールペンを差し出すと、男性がさらさらとそこに個人情報を記入し始めた。

それを見てまず驚いたのは、彼の名前だ。

カシイ重工さんに関する方だとは思っていたけど、まさか名前が香椎かしいだとは思わなかつた。——え。この人、香椎さんつていうの？ じゃあカシイ重工の創業家人……？

確かに、現社長も会長も、名字は香椎だ。思わず内心びびる。そんなすごい人に対しても粗相があつてはいけない、言動には細心の注意を払わなければ。

「これ、祈祷料の違つてなんですか？」

急に香椎さんが顔を上げたので、ビクッとしてしまう。

「は……はい、授与品の内容が違います。こちらですとお札が入ります」

「なるほど」

額くと、香椎さんは一番高い金額にマルをした。祈祷料の支払いを終えると、まずはお祓いをするために本殿の祈祷待ちスペースに案内した。

車のご祈祷の流れとしては、まずご本人のお祓いを本殿で済ませてから、車の祈祷スペースに移動して車のお祓いをする。まだ朝早くご祈祷希望の参拝者がいないため、香椎さんだけ本殿に入つてもらつた。

今日、ご祈祷を担当するのは父だが、父は香椎さんを見た瞬間に誰かわかつたようだ。

「ああ、香椎さん。いつもお世話になつております」

「いえ、こちらこそ。先日はありがとうございました」

深々と頭を下げる父に、香椎さんも立ち上がり頭を下げている。授与品を持ってきた私は、そ

んな一人の姿をぼんやり眺めてから本殿をあとにした。

——お父さんも、あの人ことは覚えてるんだな。

さつき申込書に書いてもらつたあの人名前は、香椎碧。ご祈祷する関係上読み仮名を振つてもらつたので、名前の読み方は「あお」だとわかつた。爽やかな外見にぴつたりの響きに思わず感心してしまつた。

名前までおしゃれだなあ、なんて思いながら私は社務所に戻つた。

香椎さんがどんな車に乗つているのかなんとなく気になりつつも、ぱつぱつと窓口にやつてくる参拝客の対応を続けた。ご祈祷希望の参拝客が数名いて、さつきのように本殿に授与品を持つて行つたりと、社務所と本殿を何度も行き来している途中、若い男性の参拝客に声を掛けられた。

「すみません、この辺りにあるつていう城跡に行つてみたいんですけど……」

男性はおそらく二十代前半くらい。手には地元の自治体が発行している名所マップがある。「城跡ですか、でしたら、ここからは二百メートルほど進んでいただいてですね……」

簡単にだけど、外を指差して説明する。そんなに有名な城跡ではないけれど、たまに聞かれることがあるので説明も慣れっこだ。

「……です。マップのアプリでも場所の確認はできると思いますので……」

しつかり説明したので、多分わかるだろうと思つた。しかし男性が、「待つてください」と私が社務所に戻ろうとするのを引き留めた。

「ちよつとよくわかんないんで、一緒に行つてもらいたいんですけど。休憩時間とかないですか？」

それか仕事が終わってからでも……」

ここでピンときた。これってナンパだ。

「ええ、そういうことはしておりますんの。失礼いたします」

丁寧に頭を下げて早々に逃げようとしたけれど、男性は進行方向に回り込んできた。

「あ、いやあ。休みの日でいいです！ お茶だけどうですか？」

「ええ～!! どうしてもダメですか？ 僕、お姉さんすごく好みで……。ビストライクなんです。

だからせめて一度だけ」

両手を合わせてお願いされても困る。全くといつていいほど心が動かない。

これまで時々こうして声を掛けられることがあつたから、対処法はわかっている。相手を逆上させないよう、淡々と丁寧に対応する。しかし毎度のことながら、こういう誘いを断るのは結構面倒だ。

「せめて一度だけ、なんなんですか？」

まるで私の心の声を代弁するかのように、どこからか声が聞こえてきた。

「ん？ 今の声って……」

声のした方を見ると、そこには香椎さんだつた。

「困りますね。人の彼女に気軽に声を掛けないでもらいたいな。ねえ、晶葉」

冗談とも本気とも取れるような口調で香椎さんがそう言つた。その顔は至極真面目だ。

「あ、さすがに私もどうしていいかわからずに固まつた。すると、私の隣に来た香椎さんが、耳元でこそっと囁いた。

「話、合わせて」

それで理解した。この人は、ナンパを撃退するために私と付き合つて振りをしてくれているのだと。

名前の件はモヤモヤするけど、そうと決まれば私も素早く乗つかる。

「あの……。この人とお付き合いしておりますので、お茶とかそういうことはできません」

「えつ……そ……それは……え？」

きつぱり答えた私に、男性が私と香椎さんを交互に見ながら尋ねてきた。

「はい」

真顔で頷くと、男性は観念した様子ではあ……とため息をついた。

「なんだ……残念」

男性はぼそと独りごちてから、失礼しましたと去つていった。

安堵した私は、男性の背中が見えなくなつてから、改めて助けてくれた香椎さんの方へ体を向けた。

「このたびはどうもありがとうございました。助かりました」

深々と頭を下げてお礼を言う。

たまたま通りかかっただけなのに、さつき窓口で応対しただけの私を助けてくれた香椎さんに心から感謝していると、当の本人はお礼を言われるようなことじゃない、と笑った。

「どんでもないです。男としても嫌がる女性に無理強いるようなヤツはいけ好かなくて。頭で考えるより先に勝手に体が動いていたんです。恋人の振りをしただけで諦めるような人でよかつたですね」

爽やかに微笑む香椎さんについて見とれる。

——綺麗な顔だなあ……。こういうイケメンに好かれる人って、前世でじんだけ徳を積んだんだろう……。

だけどすぐに名前の件を思い出して、我に返った。

「あつ、あの。なんで私の名前をご存じだつたんですか？ もしかして以前どこかでお会いした、とか……」

「そうではないんですが、仕事の関係で何度かお世話になつてゐるうちに、宮司さんから伺つたんです。人手が足りなくて、週末は外に働きに出でている娘にまで手伝つてもらつてゐる、と。若い神主さんと顔立ちがよく似ていらつしやるのですぐわかりました。あなたが晶葉さんだと」

「え、あ……。そういうことでしたか……」

話を聞いて納得した。香椎さんの言う『若い神主さん』とはきっと兄のことだろう。

というのも、私と兄の奏哉^{ささや}は顔がよく似ている。兄が女装をすれば私そつくりになるし、やつた

ことはないけれど、私が男装したら兄にそつくりになると思う。

年齢は四つ離れているので、兄はもう三十歳。この神社の跡継ぎとして、父である宮司のあとに控える禰宜として奉職している。

「晶葉さん、大丈夫ですか？ もしかして私が来る前にあの男性に何か言われました？」

香椎さんが身を屈めて私の顔を覗き込んでくる。

「あ、いえ。大丈夫です。それより、助けていただきたいお礼をしたのですが……」

近くにある美味しい豆大福のお店に今すぐ飛んでいつて、香椎さんに贈りたい。そう考えながら話を続けようとしたところで、香椎さんが「では」と口を開いた。

「本来であれば、お礼なんか……と言いたいところですが、実は、今夜予定していた会食が先方の都合で急にキャンセルになつてしまつて。まだ店に連絡を入れていないので、よければご一緒していただけたら嬉しいのですが。いかがでしょう？」

「急にキャンセルですか……それは困りましたね。私でよければ……つて、あ」

OKしかけてあることに気付き、口を手で覆つた。

——いけない、いけない。つい流れでOKするところだった。

私が口を噤んだせいか、香椎さんの表情が曇る。

「どうかされましたか？」

「その。男性と二人でお食事はちょっとまずい……かな、と。縁談を控えているので……。少々お待ちくださいね」

香椎さんを待たせて社務所に走った私は、とある御守りを手に彼の元へ戻った。

ちゃんとその場で待つてくれていた香椎さんに安心しながら、掌に載せた御守りを彼に差しました。

「お待たせしました。あの、お礼と言つては些少ですがこれ、うちの御守りです。よかつたらどうぞ」

香椎さんの視線が私の掌に注がれる。

「交通安全の御守りはもうお持ちなので、勝守りにしてみました。勝負事とか、仕事とか、いろいろなことで勝てるようという御守りです」

「それは……ありがとうございます」

御守り用の袋に入れて香椎さんに渡す。

受け取った香椎さんは、その御守りを袋から出し、まじまじと眺めている。ごくごく普通の御守りだが、彼はやけに勝守りに興味があるようだつた。

「じゃあ、早速試してみようかな」

「試す？ 何をですか？」

「晶葉さんの縁談相手に勝てるかどうか」

「…………？ ちょっと、今、何を言われたかわからんないんだけど……」

思わずこめかみに指を当て、香椎さんを見上げた。

「あの……、仰っている意味がよくわからないのですが」

「その通りの意味だけどな。それよりも、その縁談つていうのはもう決まったことなんですか？」
縁談に関する突つ込みに、目が泳いでしまう。

「決まったこと……と言いますか、父の知り合いの息子さんとの間で少し前からそういう話が出てるんです。まだ会う前なんですけど、父とそのお相手の間ではもう決定事項といいますか……。私も決まった相手はいないので、断る理由もないですし。ですから、そういう状況で他の男性と二人きりでお食事をするのはあまりよくないかな、と……」

自分の状況を明かすと、香椎さんの目が大きく見開かれた。

「そうなんですね。その方と会うのはいつです？」
「いえ、まだ決まっていないんです。ですから今の段階では縁談がある、としか言えないんですけど……」

せつかく誘つてもらつたのに、こんな返事しかできなくて申し訳なかつた。

香椎さんはかつこいいし、困つているところを助けてくれた。いい人だと思う。でも、だからといつて一人で食事をするのは、縁談相手に申し訳ない気がする。

少しでも後ろめたい気持ちがあるのなら、食事はするべきじゃない。

そう思つてゐるのに、なぜか香椎さんがさつきよりも力の籠もつた目で私を見つめてくる。

「それって、まだ縁談がまとまつたというわけじゃないですね」

「そ、それはそうかもしれませんけど……。でも、父と懇意にしている方のご子息なんです。失礼があつてはいけませんし……」

「であれば、まだセーフですよ。食事くらい友人同士でもします」
「いや、でも……」

「二人きりで食事をするような異性の友人なんて、私にはいりませんが……と言おうとして、やめた。」

この香椎さんという人、すごく頭の回転が速い。おそらく何を言つても、上手くかわされるのは目に見えている。

——困ったな……。どうしよう……

正直言つて、縁談に乗り気かというとそうでもない。

相手の顔は写真で見せてもらつたけど、酷いことを言うようだが可もなく不可もなくといったところで、特別心も動かなかつた。経歴も然り。だけど話を持つてくれた父の面子を立てて、一度だけ食事するくらいならいいよ、という返事をした……のが、縁談に関するここまで流れだ。

確かに縁談が決定したわけじゃない、相手にも直接会つてはいない。

思考がぐらぐら揺らぐ中、目の前で微笑みながら私の返事を待つている香椎さんをチラ見して、もう一度自分に問う。

普通は待つていたつて、いい人はやつてこない。なのに、こんな素敵な男性が声を掛けてくれたのだから、ここは流れに乗つてみてもいいかもしない。

——誘いに……乗つてみる？ みちやう？ どうする、私。

「晶葉さんとこうして神社で知り会えたのは、きっと何かの御縁だと思うんです。どうでしょうか？」

——御縁……

香椎さんの一言が、だめ押しとばかりに私の心を動かす。

神社の宮司を父に持つ私は、子どもの頃から何かにつけて御縁という言葉を大事にしなさいと教えられてきた。

父が持つてきた縁談も御縁かもしれない。でも、ここで香椎さんと知り合つたのもまた、御縁だ。恋人も婚約者もいない今なら、その御縁を信じて行動してもいいのではないか。

そう思つたら、不思議とすんなり気持ちが落ち着いた。

「そう……ですね。まだ婚約も何もしていませんし、食事をするくらいなら……いいかな」「本当ですか？」

自分に言い聞かせるように独りごちた言葉に対し、香椎さんが素早く反応した。

「心なしか、目が輝いているような。」

「え、ええ。せつかく誘つてくださつたので……私でよければ」

はつきりそう返事をすると、香椎さんは眩しくらい微笑んだ。

「ありがとうございます！ では……夕方お迎えに上がります。お仕事は何時までですか？」

「五時まで、です。ただ、着替えをするので……六時以降なら大丈夫です」

「わかりました。では、夕方六時にこちらの駐車場でお待ちしています」

では、後ほど。と言い残し、香椎さんは爽やかに去つていった。
彼の姿が見えなくなつても、食事に誘われたことが夢ではないかと思い、私はしばらくその場から動けなかつた。

五時少し前にバイトを上がり、実家に戻つた。

急に男性と二人で食事などというある意味非日常的な出来事が起きたせいで、私は酷く慌てた。
バイト中、一つ結びにしていた長い髪を解き、ほぼすつぴんだた顔にナチュラルメイクを施す。
服は上下の組み合わせを考えるのが面倒だったので、ワンピースを選んだ。

——一時間あれば余裕だと思つてたのに、意外と時間ないなあ！
アクセサリーをじつくり選ぶ余裕はなく、適当に選んで身に付けたところで約束の五分前。慌ててバッグを掴んで部屋を飛び出した。

家族に夕飯はいらないと伝えて家を出て、隣にある神社の駐車場に急ぐ。すると今朝、ご祈祷申込書で見たナンバーを付けた真新しい白い車が停まつていて、心臓がドクンと跳ねた。

——香椎さんだ。

車に近付くと、向こうも私の姿を見つけたらしく、車の中から香椎さんが出てきた。格好は昼間と少し違つていて、黒いトップスの上にジャケットを羽織つていた。

「晶葉さん」

先に向こうが私の名前を呼んでくれた。それにドキドキしながら、彼の前に立つた。

「お待たせしてごめんなさい。もしかして、結構前から待つていてくださいました……？」
「いえ、それでもないです。晶葉さんがどこから来るのかが気になつて、キヨロキヨロしてしまいました。もしかしてあちらがご実家ですか？」

香椎さんが神社の敷地の隣の日本家屋に視線を送る。

「はい、そうなんです」

「かなり大きいですね」

しみじみと言う香椎さんの気持ちもわかる。確かにうちは敷地が広い。敷地内には祖父母が暮らす家と、私たち家族が暮らす家、それと神社に関する物を収めた二階建ての蔵もある。

蔵にはなかなか貴重なものが収まつてゐるらしく、自治体の文化財にも指定されている。かなり古い文献などは自治体に寄贈したけれど、他にも厳重に保管すべきものが多いため、持ち主の家族といえども自由に入ることはできない。
「大きいんですけど、古いんですよ……。かといつてリフォームするにもお金がかかるので、維持が大変です」

「晶葉さんのお部屋もですか？」

「サッシだけは新しいものに変えましたけど、壁がもうボロボロなんです。まあ、慣れました」
ていうか、今日初めて会話を交わした相手に何を話しているのだ、私は。
「それよりも、今夜はよろしくお願ひいたします……」
気を取り直して会釈すると、香椎さんも会釈を返してくれた。

「こちらこそ。では、どうぞ。乗ってください」

助手席のドアを開けてくれた香椎さんに恐縮しながら、車に乗り込む。

乗つてすぐ、新車独特の匂いがした。何気なく目をやつたハンドルに刻まれていたエンブレムから高級車だとわかった。

——わー、こんな高級車、初めて乗つた！

でも、この人がもし私の想像通りカシイ重工の創業家出身なら、お金持ちはのも納得だ。

助手席のドアを閉めたあと、香椎さんがするりと運転席に乗り込んできた。

「さて、行きましょうか」

「はつ、はい。よろしくお願ひします……」

「ははつ、堅い堅い。もつと気楽にいきましょよ」

香椎さんは軽やかに笑つているけれど、私に余裕なんかない。

御縁は大切に、と思って一緒に食事に行くことにした。でも相手が相手だけに、どうしたつて緊張する。

「無理ですよ……。香椎さんつて、カシイ重工さんの創業家の方ですよね」

エンジンをかけながら、香椎さんがおつ、という顔をした。

「ご存じでしたか」

「わかりますよ。カシイ重工さんがご祈祷にいらした時、お見かけしたことがありますから」

「そうでしたか。いや、覚えてくださつていて嬉しいですね」

本当に嬉しそうに微笑みながら、香椎さんは車を発進させた。

——ついこの前、会社でご祈祷に来てくれた時も目が合つたような気がしたけど……まあ、覚えてるわけないか。

心の中でそう思つたけど、口には出さない。

「ところで、今夜はどちらへ？」

「ああ、はい。フレンチですが……お好きですか？」

「えつ、もちろん！ 好きつて言えるほど食べませんけど……」

「よかつた。もしお嫌いだつたらどうしようかと思いました」

ははは、と笑つている香椎さんを横目で見つつ、ちょっと待つてと冷静になる。

——香椎さんが行くようなフレンチのお店つて、もしかして私なんかがお邪魔するのは場違いなところなのでは……

急に背中の真ん中がひんやりしてきた。

適當な服を着てきてしまつたけれど、これでよかつたのか。靴も普段履いているバレエシューズだけど、汚れてはいなかつたかとこつそり確認した。

「あの……、そのフレンチつて、どういう……？」

「ん？ ああ、昔有名ホテルで修行していたシェフが結婚後にご夫婦で出した店なんですよ。古い

一軒家を改装して、気軽にフレンチを楽しんでもらいたいと思つて始めたみたいで、敷居も高くなくて通いやすいんです。でも、味は間違いないですよ」

敷居は高くない、と聞いてホッとした。

もしかして香椎さん、私がフレンチと聞いておののいたことに気が付いたのだろうか。だとしたら、すごくよく見られてる。

——いや、気のせいかな。たまたま食事することになつただけだし……
気を取り直して姿勢を正す。

「さつきの話の続きをりますけど、香椎さんって、会社ではどういうお立場なんですか……?」「どういうと?」

「いやあの、カシイ重工さんって、ご祈祷の時、役員の皆様でいらっしゃるじゃないですか。その中にいるってことは、もしかして役職に就かれているんじゃないかな、と思って……」「なるほど。晶葉さんの読みは合つてますよ。私は常務取締役なんです」

——や……やっぱり!!

隣にいる人は予想以上にすごい人だつた……と、助手席に座つたまま、思わず香椎さんから距離を取つてしまふ。

「となると、やつぱり将来的には香椎さんが社長さんとか……」

「や、それはわかりません。現社長は父ですが、今後は世襲ではなく優秀な人材が上に立つべきだと常々言っていますから。それに、私もその通りだと思つています」

考え方もしつかりしている。

——すごい、こんな人、今まで近くにいなかつたな……。それとも一流企業の創業家ともなると、

子どもの頃からそういう教育を受けてきたんだろうか……

「なんと言つうか……『立派ですね』

「そんなことはないですよ。晶葉さんの前なので、それっぽいことを言つてはいるだけです。実際は何も考えていないんですよ」

「またまた」

香椎さんの軽いノリに、思わず顔が緩む。

何も考えていない人が大企業の重役なんか務まるわけがない。絶対、今の地位に就くまでにすごく努力をしているはずだ。

——偉ぶらないところも素敵。こりや、すごくモテそうだなあ……
バレンタインに箱いっぱいのチョコレートをもらつてはいる香椎さんの姿を勝手に想像していると、隣から「晶葉さんは」と話を振られた。

「普段は別のお勤めだと、以前宮司さんにお伺いしました。それなのに週末は巫女のバイトをされているとなると、あまり休みを取れていないのでは?」「私のことを心配してくれているのだろうか。なんていい人なんだろう。

そんな香椎さんに、「いえ」と慌てて私の置かれた状況を説明する。

「確かに週末は巫女のバイトをしていますけど、人手が足りない時にちょこつと入つてはいるだけなので。今日も忙しくない時間帯は実家で休んでいましたし」「あ、そうなんですね」

「はい。それに神社に関することは生活の一部みたいなところがあるので、あまり神経を使いませんし。むしろいいバイトだと思つてます」

「それならよかつた。お忙しいのに誘つてしまつて、却つて申し訳なかつたかな、と氣になつていたんです。安心しました」

「そんなことはないです！ 逆に氣を遣わせてしまつてすみません」

——香椎さんですごくいい人そうだけど、カシイ重工さんのお偉いさんだと思うとやっぱり緊張しちゃうな……

別に私がカシイ重工さんに氣を遣わなければいけない特段の理由はない。

でも、よくうちの神社に会社で参拝してくれるし、大口の寄付もしてもらつていてることに変わりはないので、やはりそれなりの気遣いは必要だと思う。失礼なことはしちゃいけないと改めて思い、気が引き締まる。

たわいのない会話をしているうちに、車は繁華街から離れ、郊外の住宅街にやつてきた。あまり來たことがない街だ。

「この辺りにあるんですか？」

「ええ。もう少しですよ」

店 자체には駐車場がないということで、お店が指定した近くのパーキングに車を停める。車から降り、店までは香椎さんと並んで歩くことに。

隣に立つて歩いていると、香椎さんの身長の高さを思い知る。多分、私よりも二十数センチは

高い。

——私が百五十八センチだから……百八十ちょっとはあるかな。うちの兄も結構身長あるけど、兄よりも高い人は久しぶりだなあ……

身長が高いところも香椎さんを素敵だと思うポイントの一つだけ、他にもまだある。この人、すごくいい匂いがする。

香水なのかシャンプーなのかわからぬいけど、上品な大人の男というイメージの匂いに、うつかりてられそうになる。

——だめだめ、まだ食事もしていないのに今からこんなんじゃ……

たまたま相手がいなくなつたから、運良く私が誘われただけ。そのことを忘れないようにしなければ。

香椎さんと並んでいたはずなのに、氣が付くと彼の半歩後ろを歩いていた。するとそれに氣が付いたのか、香椎さんが声を掛けてくれた。

「どうしました？」

「あ、すみません、つい」

「ああ……歩くのが速かつたですね、すみません。氣が急いでしまつて」

香椎さんはわざわざ歩を止め、今度は私の速度に合わせて歩き出した。

——すごい……。元彼なんか、私の歩幅なんか構わずガンガン先を歩いてたな……

ふと、二年くらい前に別れた元彼のことを思い出してしまつた。正直言つて、あまりいい思い出

ではない。

元彼は大学の時の同級生で、卒業してから偶然再会して、そこからお付き合いをすることになった。最初は優しかったけれど、付き合い始めてから態度が少しづつ変わり、モラハラ気質などころがちらほら露見するようになつた。

そんな元彼のことを兄に相談したところ、すぐに別れると言われた。でも、好きなことには変わりなかつたし、すぐに行動できなかつた。だけどやつぱりモラハラは積もり積もると体へのダメージも大きく、彼に会うのがだんだん怖くなつてしまつた辺りで、こちらから別れを切り出した。案の定、最初は「嫌だ」と抵抗されてしまい、そう簡単に別れることはできなかつた。でも、繰り返し別れたいと訴えたら、向こうも根負けしてようやく承諾した。

でも、あとになつて共通の友人が明かしてくれた話によると、実は職場に気になる女性がいたようで、私と別れてすぐそちらに乗り替えたらしい。

普通だつたら「別れたばつかりなのに、すぐ次に行くなんて!!」と腹立たしく思うかもしれない。でも、私の場合はむしろホッとした。次の相手が見つかったからこそ、すんなり私から離れたように思えたのだ。私にとつていい結果になつたのは、後腐れなく別れさせてほしいと何度もうちの神様にお願いしたからかもしれない。

——そう、うちの神様、結構すごいのよ。

心の中でうちの神様に、今日も香椎さんと出会わせててくれてありがとうございます……とお礼を言つてゐるうちに、目的地に到着したらしい。

「ここです。どうぞ」

香椎さんが先にドアを開け、中に入るよう促してくれた。それにお礼を言いつつ中に入ると、すぐに白いシャツに黒いパンツ姿の女性スタッフが出てきた。

「いらっしゃいませ。香椎様、本日はご予約ありがとうございます」

「こんばんは。今夜もよろしくお願いします」

スタッフの女性は、香椎さんの顔を見てすぐに誰かわかつたようだ。それに彼も笑顔で返し、私たちには店の奥にある席に通された。

おそらく外から見た感じでは、建物自体の築年数はかなり経つてゐる。でも、内装はリフォームしたのか、壁と床は真っ白でとても清潔感がある。

席数はあまり多くなく、テーブルが四つ。カウンター席もあるけど、夜は完全予約制らしい。白いクロスをかけた長方形のテーブルには、すでに皿やカトラリーがセッティングされており、席に着くとすぐに飲み物のメニューを渡された。

「晶葉さん、お酒は? 私は運転するので飲めませんけど、晶葉さんはお好きなだけ飲んでください」

「いやいや、そんな。私もそんなには飲めないので……一杯くらいで……」

「じゃあ、シャンパンとかどうです?」

香椎さんに勧められるままに、じゃあそれを、と応えた。彼はガス入りの水を頼んでいた。ディナーはコース二種類のみで、香椎さんは事前にコースを選んでいたらしい。聞いたら高い方

のコースで、心の底から「恐縮です……！」と声が出た。

「まずは乾杯かな。今日はお疲れ様でした」

「お疲れ様です」

運ばれてきたばかりの炭酸水とシャンパンで乾杯した。早速シャンパンを口に含むと、フルーティな味が口の中いっぱいに広がった。

「美味しいです……！」

思わず顔が緩む。そんな私を見て、香椎さんも満足げに微笑んだ。

「よかつた。ここ、出されるものがすべて美味しいんだよ」

そう言われて、このあとどんなものが出てくるのか、俄然期待感が高まる。

まずアミューズ、それからオードブル、スープと進む。どれも食材を丁寧に調理し、見た目も味も申し分ない料理だった。特に蕪のポタージュは、蕪つてスープにするところなに美味しいんだ……と感動した。

食べている間も香椎さんとちよこちよこ会話したけれど、あまりの美味しさに話の内容を忘れてしまうほどだった。

魚料理は鱈で、ふわっふわ。メインの仔牛のローストは、これまた食べたことがないくらい柔らかくて肉自体に甘みがあつて最高だった。マデラソースもとんでもなく美味しかつた。

「やばいです……美味しいすぎます……」

語彙力がなくて本当に申し訳ないが、こういう時つて美味しいという単語しか出てこない。

何度も美味しい、美味しいと繰り返す私を見て、香椎さんが笑つた。

「あはは。そんなに喜んでもらえたら誘つたこつちも嬉しくなるな」

「いやだつて、本当に美味しいんですけど、今 日香椎さんとお会いできて幸運でした」

両手を動かしながらちらつと香椎さんに視線を送る。すると、なぜか香椎さんがじつとこつちを見つめていて、ちょっとドキッとした。

「実は……会食の予定は元々なかつた、つて言つたらどうします？」

「……え？」

私が聞き返すと、香椎さんがふつ、と表情を緩めた。

「なんてね。それより、さつきの話ですが神社も人手が足りていないと。どこも人手不足は一緒ですね」

香椎さんが丁寧な所作で肉をカットし、口に運ぶ。

「そうですね……。父が言つていたんですが、求人を出したとしても問い合わせが少ないそうです。それに神社でのご奉仕となると、髪を染めちゃいけないと、ネイルは不可とか、採用条件がいくつありますし……」

「晶葉さんも髪は染めていらっしゃらないようですね」

「はい、今は染めてないです」

巫女のバイトをしていなかつた大学時代は、何回か髪を染めてみたこともあつた。だけど、なん

となく自分には似合つてないような気がして、早々に元に戻した。

「今は、か。髪を染めた晶葉を見てみたいような気もしますね」

「普通ですよ。金髪とかなら変化も大きいと思いますけど」

「金髪があ。尚更見てみたいな」

和やかなムードで食事を進め、ついに食事も終盤。デザートがやつてきた。身も心も満足しながら、白い皿に載ったウフアラネージュというデザートを口に運ぶ。クレームアングレーズにメレンゲを浮かべたデザートなのだそう。

——ああ美味しい。最初から最後まですべてが美味しい。

お酒に弱い私でも、最初に乾杯したシャンパンはあつという間に飲み干してしまった。香椎さんが気を利かせてくれて、もう一杯シャンパンを追加したせいもあって、私は今、ほろ酔いだ。

「香椎さん、今夜は本当にありがとうございました。こんなに美味しいお食事をいただきて、なんとお礼を言つたらしいのか」

素直な気持ちを伝えたところ、なぜか香椎さんがクスッと笑つた。

「とんでもない。今夜はこんな素敵な時間を一緒に過ごすことができて、私の方がお礼を言いたいくらいです」

ずっとブレずにスマートなままの香椎さんに惚れ惚れしてしまう。

「いえいえ。香椎さんと一緒に過ごしたい女性はたくさんいると思いますし……」

「ところで晶葉さん」

謙遜していたら、香椎さんが急に話を変えた。

「昼間教えてくださった縁談のことですけど、相手の方とはまだ会つていらないんですね？」

「え？ あ、はい……。でも写真では見ていますし、うちに参拝してくださっている方なので、あちらは私のことを知つていてるらしいんです」

「なるほど。ということは、あちらが晶葉さんを見初めて縁談を持ちかけた、といったところでしようか」

これに関しては私もよくわからないので、小さく首を傾げる。

「さあ……見初めたかどうかはわかりませんが、年齢が近くてお互い独り身だから、というのが大きな理由のようです。父がそう言つていました」

「どうかな。本音は別のところにあるような気がしてならないな」

そろそろそつと零した一言の意味を考えていると、いつの間にかデザートを食べ終えていた香椎さんが、テーブルの上で腕を組み、身を乗り出してきた。

「でもあなたはその縁談に乗り気ではないんですね？」

「……はあ……まあ……そう、ですかね……。正直、ピンと来てないと言いますか……。でも、父の面子もありますし、会うのは避けられないかなと」

「では、縁談の前に恋人を作つてしまふ、というのはどうでしょうか」

「……恋人、ですか？」

香椎さんが優しく微笑んだ。

「お互い独り身だからお見合いをする。なら、恋人ができればお見合いをする必要はなくなりますよね？」

「いや～……それはそうですが、そんな簡単に恋人なんてできませんよ。職場でも出会いは皆無ですし……」

「私でよければどうです」

思わず無言のまま香椎さんを見つめる。あと残り僅かのデザートを食べる手も止まった。

「え？ それは、どういう……？」

「そのままです。私は、喜んで晶葉さんの恋人になります」

「や、あの、えーっと……それはどういう意味で取つたら……ちょっと今、私、酔つてるのもあって、上手く頭が働かなくて……」

額に手を当てながら、ちらつと香椎さんに視線を送る。私の反応に少し困ったような顔をしつつも、彼は再び口を開いた。

「ではもう一度。その縁談は受けず、私とお付き合いしませんか」

「本気で言つてるの？ この人。

驚きと困惑で、目をパチパチしてしまった。

「えつと……その、香椎さんは今日会つたばかりで……今はまだ、そういうことは考えられません……」

「お互い顔は知つてたじゃないですか」

「そ、そっだけど!!

「付き合うとなると話は変わつてくるといいますか……せめてもう少し考える時間をください」

繋るようにそうお願いすると、根負けしたのか、香椎さんはため息をついた。

「仕方がないですね。待ちましよう。でも、縁談相手に会う前には決断していただきたいです」

「そっ、それは……はい……」

「まあ、断られても諦めませんけどね」

「だめ押しの一言に面食らう。

「諦めないって、どういう……!? 最初から私に選択肢はないってことですか？」

「晶葉さんには選択肢がありますけど、私に諦めるという選択肢はないということです」

「言つてることめちゃくちゃですけど……!!」

私たちがデザートを食べ終わつたのを見計らつて、食後のコーヒーが運ばれてきた。

さつきまでの流れなら、コーヒーでホッと一息つけるはずだった。なのに香椎さんからの申し出に動搖してしまい、一息つくどころじやない。

一気にコーヒーを飲み干したい気持ちなのに、熱くて少しづつしか飲めず、歯がゆい。

「なんで私なんですか？ 今日一日で香椎さんに好きになつてもらえるようなこと、私、何もしてませんよね……？」

香椎さんがコーヒーを一口飲んでから、それに対する答えをくれた。

「なんでと言わても、ごく自然にあなたのことを意識するようになつた、いうところでしようか。

実は、私が晶葉さんを見かけたのは前回の参拝の時と今日だけではないんです。個人的に、あの神社には子どもの頃から定期的に参拝していたので

「そうなんですか？」

すぐに聞き返したら、香椎さんがこりと微笑んだ。

「ええ。ある時は祖父と、ある時は父と参拝しました。子どもの時はさすがに晶葉さんの存在には気付きませんでしたが、二十歳^{はたち}を過ぎてから何度かあなたを社務所で見かけています。あの初々しさは高校生^{だつ}たんじやないかな。御守りとお札を販売していました」

「それは……確かに、高校の頃は週末とか長期休みにバイトしてたので……」

その頃を思い出してか、香椎さんが優しく微笑んだ。

「考えてみたらあの時からじゃないかな、私が晶葉さんの存在を認識したのは。それから何度もか訪れているうちに、晶葉さんが宮司さんの娘さんだと知りました。それからですね、来るたびにあなたのことを見てしまっていたのは」

「そう、でしたか。結構前から見られてたんですね。ちょっと恥ずかしい……」

普段あまり人に見られているという意識がなかつたので、彼が私をそんな前から見ていたことに驚いてしまつた。

「それにしても、悔いな」

言葉の通り、心底悔しそうな顔をしてため息をつく香椎さんに、何を？ と首を傾げる。

「うちは宮司さんとも以前から交流はあるし、晶葉さんのことはずっと前から知つていたのに、な

ぜ縁談の話を先に持ちかけなかつたのかと」

「えつ……」

縁談の話つて。

——もしかして、私と結婚したい、ということ……？

それを理解した途端、心臓がバクバクしてきた。

「正直ここ数年で一番悔しかつた。やっぱり心から欲しいものがある時は、待つてはいるだけじゃダメだと今回のこと学びました。ですので、さつきも言いましたけど、あなたのことは諦めませんので」

「諦めないつて……ほ、ほんとに？」

香椎さんの表情は柔らかいけれど、話す内容は全然柔らかくない。

「これからよろしくお願ひしますね、晶葉さん」

ノーと言わせないという強い意思が感じられる彼の言葉に、私はドキドキしながら俯くことしかできなかつた。

「はあ……」

普通に仕事をしているだけなのに、定期的にため息が出てしまう。

この原因は、私の前に彗星の如く現れた香椎さんのせいである。

初めてまともに会話を交わしたその日に食事に誘われて、まさかそこで付き合ってくれと言われるとは思わなかつた。

——ほ、本当に軽い気持ちで……お礼のつもりで誘いに乗つただけだつたのに……

ここ数年男性からのお誘いもなく、ようやく最近縁談をもらつて近々会うかも、というこの状況で、あんなハイスペックな人にあんなことを言われるなんて。

これも何かの御縁だと、親しくなるべきになればいいな、くらいのつもりだつた。なのに一足飛びで付き合おうとか、先に縁談を持ちかけなかつたことが悔しいとか。

あの夜はあまりにいろんなことを言われすぎて、頭がオーバーヒート寸前だつた。

数日経つたこともあり、さすがに少しは冷静になつてきたけれど、今でもあの夜のことを思い出すとまたドキドキしてしまう。それだけ、香椎さんの眼差しや表情に強い意思を感じた。

——そのせいで帰りの車の中で何を話したかとか、なーんにも覚えてないんだよね……

料理がどんなだつたとか、他にもいい店を知つてるんによかつたら……とか、そういうことを話していたような気がする。でも話の途中くらいから、香椎さんがなぜ私を良いと思ってくれたのかが気になつて、何を話しかけられても全然頭に入つてこなかつた。

そして家の前まで送つてもらつたあと、香椎さんから連絡先が書かれた名刺を渡された。

『いつでも連絡ください。出られなかつた時はこちらから折り返しますので』

【カシイ重工 常務取締役 香椎碧】

名刺に視線を落とし、改めて香椎さんの肩書きにびびる。

『かつ……かしいさん、お名前……あお、っていうんですね……』

名刺を受け取つた私は、名前の横のローマ字を読みながらそう呟いた。本当は車のご祈祷申込書を書いてもらった時に気が付いて、すでに知つていたものの、何を話していいかわからなくて咄嗟^{とっさ}に口にしてしまつた。

『そうなんですよ。よく“みどり”と間違えられますけど、“あお”と読みます』

『そんな私を見て、香椎さんがクスッと笑う。

『ありがとうございます。“晶葉”も素敵なお名前だと思いますよ』

さりげなくそういうことを言うのが、できる男という感じがする。

ありがとうございますとお礼を言い、香椎さんの車が見えなくなるのを目で追つた。

——かつこ……よかつたな……

同級生だった元彼とは、友達の延長から恋愛関係に発展した。

付き合い始めた時も『俺たち、付き合っちゃう?』みたいな軽いノリからのスタートだったの、香椎さんみたいなアプローチは一切なかった。

だから今回ることは人生初の経験で、正直どうしていいかわからない。

こういう時に相談できる恋愛経験が豊富な人って誰かいなかつただろうか。勤務先の住宅設備会社だと、女性は私の他にベテランのパートさん、それと社長の奥さんしかいない。それに恋愛の話なんか過去に一度もしたことがない。

となるとやはり友人だろう。そう思い、昼休みに友人の翔子にメッセージを送った。

【急に付き合ってほしいって言われたんだけど、どうしたらいいの】

これに反応してくれるのを待つ。するとＩＴ関係の会社で働く彼女も昼休みらしく、すぐにメッセージが返ってきた。

【なにそれ、詳しく聞かせて】

文章で書くと長くなるので、近いうちに会えないかと誘つたら、すぐにOKと返事が来てホッとする。

翔子との約束を取り付けて安心したところで、お弁当を食べ進めた。

お弁当は私と母が協力して家族全員の分を作る。忙しくて父と兄には時々注文してもらうこともあるけれど、基本的には毎日、夕飯の残り物なんかをサッと詰めるようにしている。

お弁当を食べながら、香椎さんはどんなお昼を過ごしているだろうかとぼんやり考える。

——きっと前の日の残り物なんか食べないんだろうな、あんな大きな会社の重役は……
そう思うと、自分と香椎さんじや釣り合わないんじやない? と思えて仕方ない。

あの人はそういうところ、ちゃんとわかっているのだろうか。

さつきまでとは違う種類のため息をつきつつ、箸を動かす私なのだつた。

私の勤務先はよほどのことがないと残業はない。だから毎日きつちり五時には上がることがで
きる。

実家の神社の社務所も五時で閉めるので、平日の仕事終わりに手伝うことはない。でも社務所を閉めたあとでも、宮司である父は地域の集会に呼ばれたり、兄は青年会の集まりがあつたりして家を空けることが多い。

今夜も父が地区の集まりで不在のため、夕飯は各自好きなように済ませてほしいと帰り道に母から連絡が入つた。こういう時、恋人のいる兄は決まって彼女のところへ行くので、私はいつも近くの商店街でお弁当を買って帰るか、家にある食材でぱぱっと適当に作ることが多い。

——だったら、翔子に今夜空いてるか聞けばよかつたな。さすがに今からじやもう遅いし、諦め
るしかないよね……

翔子と会うのはまた今度にして、帰り道にあるお弁当屋さんでキーマカレー弁当を買った。袋の中からふわりと漂うカレーの匂いに食欲をそそられながら帰宅すると、実家と神社の境目辺りの壁際に人が立っているのが見えた。

神社 자체는 밤에도 들어갈 수 있는 것이다. 사람들이 수십 명 모여 있거나 하는 경우는 많지 않다. 그렇지만 그들이 사랑하는 남녀의 모습을 발견하거나, 그런 때는 그들이 예상치 못한 행동을 하는 경우는 많다. 그래서 그런 때는 그들이 예상치 못한 행동을 하는 경우는 많다.

「しかし今夜私が目にしたのは、若者の集団でもカップルでもなかつた。見覚えのある背格好は、どう見たつて香椎さんだつた。」

「え……香椎さん!?」

驚きのあまり声を上げたら、彼がこちらを見て微笑んだ。仕事帰りなのか、スリーツ姿の香椎さんに意図せざドキッと心臓が跳ねた。

「晶葉さん。お帰りなさい」

いきなり爽やかなお帰りなさいをいただいてしまい、香椎さんにどんな声を掛けたらいいか言葉に詰まつた。

「お、おか……お疲れさま、です……？ それより香椎さん、どうしたんですか？ 何かありました……？」

ふらつと神社に立ち寄つた、なままだわかる。しかしあう社務所や本殿は閉じているし、周囲は真つ暗。参拝にきたとは考えにくい。

もしかしたらこの前、車に乗つた時に忘れ物でもしたのではと思った。でも、そうではなかつた。特別何かあつたわけじゃないです。ただ、ここで待つていれば晶葉さんに会えるかなと思って、待つていました」

「まつ……え？ 私を待つてた、んですか……？」

「仕事は五時で終わると言つていましたよね。五時過ぎにちょうど出先から直帰するのにこの近くを通つたので、運が良ければ会えるかなと思つて。会えてよかったです」

「えつ、五時過ぎ……!? ってまさか、一時間近くここに……!?」

まつすぐ帰つてくれれば五時二十分くらいには帰宅できた。でも、今日は途中で百均やお弁当屋さんになつて立ち寄つたので、三十分くらい余分にかかつていて。

——なつ……待つてて知つてたら、まつすぐ帰つてきたのに！

「すみませんっ、帰りに買い物をしていて。もじご連絡いただけたらまつすぐ……あ」

自分で言つていてしまつた、と固まつた。

「いや、連絡先まだ教えてもらつてないんで……。晶葉さんに会うためには、直接赴くしか方法がなかつたんです。すみません」

スリーツをビシッと着こなした香椎さんに謝られると、なんだかすつごく悪いことをしているような気がしてならない。

「いえ、どんでもないです……。あの、この前はご馳走さまでした。とっても美味しかつたので、家族にあのお店のこと話したら、両親も兄もぜひ行つてみたいと言つていました」

「ぜひぜひ。あの店のご夫婦も喜ぶと思います」

たわいない会話をしながら、香椎さんに連絡先を教えるべきか悩む。

ずっと前から知つていたとはい、こうして話すのはまだ二回目。個人的な連絡先を教えるには

早いのではという気持ちがある。

——でも、私に会うために待つてくれたのに、なんだか悪いな……

せめて家の中でお茶でも……と思つたが、ポツポツと顔に水滴が落ちてきた。

「あ、雨ですね。天気予報でも夜は雨つて言つてましたもんね」

二人で空を見上げる。よかつたら中に……と言おうとした。しかしそれより先に、香椎さんが口を開いた。

「晶葉さん、早く家の中へ。私もこれで失礼します」

「えつ。でも、せつかく来てくださったのに……あの、もしよければ家の中へ……」

「ありがとうございます。でも、今日は失礼します。晶葉さんに一目会えただけで満足しましたし」

本気なのか冗談なのか、わかりにくい。

でも香椎さんは言葉通り、駐車場のある方へ体を向けた。

「そんな……。何か用があつたのでは……」

「はい。晶葉さんに会うという用があつただけなので、お気になさらず。では」

「え、ええ……」

何か言おうと言葉を探している間に、香椎さんは駐車場へ走つていつてしまつた。

——本当に私に会うためだけに来てくれたの!?

だんだん雨脚が強くなつてきた。そんな中、駐車場を出て行く香椎さんの車が見えた。早く家の

中に入った方がいいのはわかつていたけれど、なんとなく彼の車が見えなくなるまで目で追つてしまつた。

「……というわけでね、わざわざ私に会うためだけに来てくれたみたいなの、その人」

香椎さんが会いに来てくれた数日後。

事前に会う約束を取り付けていた友人の翔子と、家の近所にある居酒屋にやつてきた。翔子とは中学校で知り合い、同じ高校に進学した仲だ。大学は別だけどお互いに実家住まい、今夜のように定期的に会つては近況を報告し合つている。

この居酒屋はチェーン店で、価格がリーズナブルなのでよく利用する。安価だけど、焼き鳥も食事系メニューもそこそこ美味しい。たくさん飲みたいし食べたい時にはもつてこいだ。

衝立で仕切られた四人掛けのボックス席でお互いに生ビールで乾杯したあと、早速香椎さんの話題を出すと、翔子が食いついてきた。

「えー……すごいね。本当に会つただけで満足して帰つちやうなんて。普通はそんなこと言つても相手が家に寄つてけつて言つたら寄るよね……」

仕事帰りの翔子は綺麗なボブヘア。眼鏡を掛けているので、ぱつと見は知的美人だ。彼女には大学の時からずっと付き合つてゐる彼氏がいる。同棲も視野に入れているらしいけど、お互い仕事が忙しくてなかなか行動に移せないのが悩みだそうだ。

「私としては、帰りを一時間近く待つてことは、何か言いたいこととかがあつたんじやないか

なつて思つたのよ。それに昨日はお父さんもお兄ちゃんも出かけてたから、気を遣うことなく家に上がつてもらえたと思うんだけど……」

「おばさんはいなかつたの？」

「お祖父ちゃんとお祖母ちゃんの介護で実家に行つてた。まあ、家族がいたとしても雨が降つてきたら、家に上がつてくれつて言つたと思うけど」

「はあ……と思わずため息が漏れる。これは、どうしたらしいかわからないという意味のため息だ。

「特に気になることがないんなら、思いきつて付き合つちゃえば？」

翔子がささみ串を食べながら提案してくる。

「いや、だつて相手はカシイ重工のお偉いさんよ……。お父さんとも付き合いあるみたいだし、もし付き合つてみて合わないつてなつたら、すごく気まずいし……」

「付き合い出したら結婚するしかない、みたいな恋愛はやつぱり踏み出すのが怖い。

でも、私のそんな考えを翔子は一蹴する。

「そんな馬鹿な。おじさんだつて娘の恋愛に口出しなんかしないと思うよ」

翔子に言われて、それは一理あると思った。

確かに父はこれまで、私の恋愛に口出ししたことなんかない。たとえ相手がカシイ重工さんの重役だとしても、私にあれこれ言うとは考えにくい。

「かどいつてなあ～。まだ香椎さんのことよく知らないし、見た目だけでお付き合いを決めてもあとで困つたことになつたら嫌だし」

「困つたことつて、具体的にどんな？」

「えー……それはほら、最初はいい人そな顔で近付いてきて、付き合つた途端に俺様になつたりモラハラが出てきたりとか。私、香椎さんみたひない家柄の知り合いなんかいしないしさ……それに、そもそもなんでただの、普通の会社員で実家が神社つていう普通の私を見始めたのか、そこが一番謎なのよ」

「ずっと疑問だつたのがそれだ。

香椎さんみたひな人なら、もつとすごい肩書きの女性と知り合うことなんかいくらでもできるはず。それなのに、なぜ私なのか。そこが理解できない。

「理解できなかつたつて……好きになつちやつたら相手の肩書きとかつてどうでもよくなるもんじゃない？」相手の方も、普通に神社にいる晶葉を見初めただけなんじやないの」

翔子が美味しそうに食べていたので、私もささみ串をもらつた。それに少し山葵をつけて口に運ぶ。柔らかいささみの食感と、山葵のピリッとした辛さのあとに口の中に広がる甘さ。美味しいな……と思いつつ、頭に浮かべるのは香椎さんの顔だ。

——顔は……好きだけどな。爽やかでかっこいいし……

でも、あんなかっこいい人が自分の彼氏とか、ピンとこなさすぎて。全然現実味がない。

「そうなのかなあ……」

「自分のどこがいいんですか、つてちゃんと聞いた？」

「今度はチャーハンを食べながら翔子が聞いてくる。

「なんで私なんですか、とは聞いた。でも、明確な答えは返つてこなかつたような……。私もチャーハン食べたい」

私の存在は知つていてずっと前から見ていた。自然に意識するようになつた、としか聞いてない。「……そこらへん、また会つた時に聞くべきだよね……」

取り皿にチャーハンを載せながら、自分自身に言い聞かせるように独りごちる。

「まあ。その方が晶葉もすつきりするとは思うね。でも、顔を見るためだけに来てくれるなんて、考えようによつては相当晶葉のことが好きなんじやない？ その人」

「……どうなんだろ。よくわからない」

もしそうだとしても、自惚れちゃいけないような気がする。

考えすぎかもしれないけど、人生どんな落とし穴が待つてゐるかわからなかから。「まだだめ。なんとなく完全に信用しちゃいけないような気がしてさ。もしかしたら、何か思惑があつて近付いてきたのかも知れないし……」

「思惑つて何。例えば……晶葉の家の神社を乗つ取るとか？」

翔子の予想が斜め上過ぎて、思わず飲み始めたビールを噴き出してしまう。

「さすがにそれはない……と思う。うちの辺りはそんなに地価も高くないし、万が一でも狙うなら、もつといいところはたくさんあるでしょ」

「いやいや土地じやなくて！ 例えば、晶葉の家の蔵にあるお宝とか」

「宝あ～？ いやいや、家族だつて中に何が入つてるか口伝えで、しかもほとんど見たこともない

のに、香椎さんが知つてゐるとは思えない」

私が聞いたことがあるものだと、刀とか、神社と縁のある絵師さんが描いた絵画とか、神社の歴史を記した巻物……くらいな気がする。しかも、刀も著名な刀鍛冶師の作ではないし、絵の価値も目の色を変えるほどではない。

どれも香椎さんが私と結婚してまで欲しがるようなものではないと思う。

あてが外れた翔子が、残念そうに肩を竦めた。

「そつか……。じゃあ、本人に直接聞いてみるしかないよね。あとはほら、晶葉が口癖のように言う御縁よ。この人だ！ って思つたらお付き合いでも結婚でも決めちゃえばいいんじやない？」

「御縁ねえ……確かにそれは、そなんだけどね」

初めて会話を交わしたあの日、これも御縁だと思つて香椎さんとの食事を決めた。

その後ああいう流れになつて、御縁という単語も吹つ飛ぶくらい戸惑うことになつたんだけど。——もう一度ちゃんと会つて話して、本当にお付き合いしてもいい人か見極めればいいか……「そう考え込まなくともさ、私たちまだ若いし。もしかめでも、次に行けばいいんだよ」

「次ねえ……。でも翔子は大祐君と別れる気、ないんでしょ？」

翔子がお付き合いしている人は大祐という。大学からの縁で静かに愛を育んでいる一人には、これまで別れの危機が訪れたこともなく、順調だつた。

大祐君の名前を出した途端、翔子が恥ずかしそうに笑う。

「ええ？ うちはまあそ～ね。山もなく谷もなくで楽だから、他に行く気もなくなつちやつた」